鈴木純がやって来た

スティーヴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鈴木純がやって来た

【Ｎコード】
Ｎ４４４９Ｚ

【作者名】
スティーヴ

【あらすじ】
今回は「ガキの使い」の「森三中がやって来た」を鈴木純をメインに書いてみました。
キャラ崩壊注意です。これも「コント」です！

どうも中野梓です。

今日は皆様にある日の部室で起こった出来事を紹介したいと思います。

その日もいつも通り練習をしていました。

ジャーン

唯「ふい～終わったぁ」グテー

澪「こらっ唯、今日はしっかり練習するって約束したじゃないか！」

律「でも澪～私も疲れた・・・」

梓「律先輩！部長じゃないですか、しっかりして下さいよ！」

紬「でもちょっとだけ休憩しない？」

唯律「「さんせーー！！」」

澪「仕方ないなぁ・・・ちょっとだけだぞ」

梓「はぁ全く・・・」

紬「うふふ、私お茶淹れるわ」

唯「ムギちゃん！今日のおやつは何？」

紬「唯ちゃんの大好きなイチゴショートよ♪」

唯「おぉ～ありがと～、ムギちゃん大好き♪」ダキッ

紬「もぉ～唯ちゃんたら／／」

律「私も大好きだぜー！」ガバッ
紬「りっちゃんまで／／」
澪「食べたら練習するからな！」ビシッ
唯律「「わかってまーす！！」」
梓「本当にわかってるんですかね・・・」

ここまではいつも通りです。
普通ならこの後ティータイムに入り、終わったら練習する予定でした。
しかし、『あいつら』の登場で私達はとんでもないことに巻き込まれてしまったのです。

紬「紅茶が出来たわよ～」
唯「わ～い！お茶だよお茶～／／」
律「早く飲もうぜ～！」
澪「はぁ・・・全く」
梓「子供みたいですね・・・」
一同「いただきまー・・・」

ガチャッ　？「失礼しまーす」

一同「？」クルッ

憂「おはようございまーす」

純「・・・・・・」モジモジ

律「憂ちゃんと・・・鈴木さん？」

唯「憂～どうしたの？」

憂「うん、ちょっとね」

純「・・・・・・」モジモジ

梓「純、どうしたの？」

純「へっ！？・・・う、うん・・・」モジモジ

憂「ほら純ちゃん行きなよ～」

紬「どうしたの純ちゃん？様子がおかしいわよ」

純「うぅ～・・・」モジモジ

憂「私が代弁しようか？」

純　コクッ

梓「なんなのよ純・・・」

憂「澪さん！」

澪「はいっ！？」

憂「今日、純ちゃんは澪さんに用があってここまで来ました」

澪「私に？」

憂「はい、ほら純ちゃん！勇気を出して！」

純「うん・・・」テクテク

澪「鈴木さん、私に用って？」

純「あっ・・・あの・・・その・・・っ澪先輩！！」

澪「ひえっ！な・・・何？」

純「これっ！誕生日プレゼントです！！」スッ

澪「えっ！？」

律「澪の誕生日って1週間前じゃん」

梓「遅過ぎじゃないの！？」

憂「恥ずかしかったもんね？」

純　コクッ

唯「でも澪ちゃん、せっかく純ちゃんが持って来てくれたんだから」
紬「澪ちゃん、受け取るべきよ」
澪「あっあぁ・・・ありがとう、鈴木さん」
純　カァァァ　グイッ
澪「えっ！？ちょ、ちょっと何で腕を掴むんだ！？」
憂「じゃあこれで純ちゃんは澪さんと付き合うってことで・・・」

一同「はあああ！！？？」

澪「いやいやちょっと待ってくれ！付き合う！？」
紬「（まさかの展開！！）」
梓「ちょっと憂、純！何言ってるのよ！」
律「唐突過ぎやしないか！？」
唯「でも澪ちゃんはどうなの！？」
澪「いや・・・突然過ぎて何がなんだか・・・」
純「澪先輩・・・」ウットリ

憂「よかったね、純ちゃん！」

澪「ちょ、ちょっと待ってくれ！困るよ、鈴木さん！いきなり！」

梓「純やめなさいよ！澪先輩が困ってるじゃない！」

純「はぁ！？困ってるってどういうことよ！！」

梓「いや、だから・・・」

純「おめぇうるせえよ！！」

梓「なっ・・・うるせえってどういうことよ！」

純「おめぇ気持ち悪ぃんだよ！喋んじゃねーよ！！」

梓「何よその言い方！！」ガタン

唯「はわわわあずにゃん落ち着いて！」ガシッ

律「鈴木さんもやめろって！」

紬「純ちゃん、無理矢理はよくないわ！」

純「やかましい！アホンダラ！ボケェ！！」

憂「黙ってろコノヤロー！」

唯「ひいいい・・・二人共こわい～」ガクガク

律「憂ちゃんまでなんなんだよ！」

紬「２人共どうしたの！？」

唯「そうだよ、変だよ２人共！」

純「はぁ！？変なのはおめぇの頭だろうが！！」

憂「何よ『うんたん♪うんたん♪』って気持ち悪ぃ！！」

唯「そ、そんな言い方しなくても・・・」グス

紬「ちょっと2人共言い過ぎよ！」

純「うるせえなおめえはよ！喋んじゃねえよ！」

憂「沢庵マユゲ！あんたが喋ると場が暗くなるんだよ！！」

紬「ば、場が暗くなる・・・たくあんって・・・ううう、ヒドいわ・・・」

梓「ちょっといい加減にしなさいよあんた達！失礼でしょ先輩達に！」

澪「もぉ～うるさいなぁ今日は帰ってくれ！」

梓「そうよ！帰りなさいよ！」

純「帰れじゃねぇよ！なんだこのゴキブリギタリスト！！」

憂「その髪がいつもゴキブリの触覚に見えんだよ！」

梓「ゴ、ゴキブリって・・・あ、あんた達いい加減に」

律「まぁわかるけど・・・」

梓「律先輩！」

律「わぁ！じょ、冗談だよ」

憂「とにかく澪ちゃんに話があるんだから、その他は邪魔！」

純「そうよ！おめぇらこそ帰れ！ねぇ澪ちゃん？」

澪「み、澪ちゃんって・・・」
律「ちょちょちょ、澪ちゃんはないだろ。先輩なんだからさ・・・」
純「あぁ！？貧乳デコ助コノヤロー！」
憂「ちったぁねぇ澪ちゃんと私見習って巨乳になれや！」
律「なっ！うるせー！余計なお世話だ！」
澪「あ～もおっ！うるさい！」
純「あっごめんね澪ちゃん！私達の愛を邪魔する奴らはすぐに帰らせるから！」
憂「帰れ！帰れ！」
澪「いや、だから・・・」
律「だぁ～！！もう二人共ちょっとこっち来い！」
紬「奥で話合いましょ！」

こうして私達は純が澪先輩に告白するのを無理矢理手伝わされるのでした。

純「何だよもう・・・」

唯「とりあえず二人共落ち着いて」

憂「私達は落ち着いてるわよ」

梓「どこがよ・・・」

律「あのな、澪の好みって結構変わってるんだぞ！？」

純「変わってる？」

唯「そうだよね、私もそう思う」

紬「私も」

梓「私もです」

憂「例えばどんな子が好きなの？」

律「そうだな・・・昔言ってたんだけど」

純「何よ、早く言いなさいよ」

律「なんか・・・焼肉のタレを一気飲みする子は素敵だって言ってたような・・・」

『澪は焼肉のタレを一気飲みする女が好き』

唯「あっでもわかる気がする・・・」
紬「澪ちゃんは怖がりだからそういう度胸の持ち主に惹かれるのもわかるわね」
梓「まぁそれが出来れば告白も上手くいくんじゃない？」
純「本当？」
律「大丈夫、成功すれば絶対にイケる！」
純「でも・・・焼肉のタレなんてないじゃんか」
唯「そうだよねぇ」
紬「無理も無いわ」
梓「こんな場所にあるわけないわよ」
憂「あぁ！！」
律「ん？どうした？」
憂「これ焼肉のタレじゃん！」
唯「えぇ！？」
紬「どこにあったの！？」
梓「てか誰が持ち込んだんですか！？」
憂「純ちゃんツイてんじゃん！イケるよ！」
純「うん、行ってみる！」
律「おいおい、大丈夫か？」

唯「しかもそれ辛口のタレだよね？」
紬「絶対に無理よ」
梓「体壊しても知らないからね」

純「澪先輩！ちょっと見てて下さい！」

澪「ん？何？」

純　ゴクゴクゴク

澪「！？おい！何やってるんだよ！！そんなもの飲むな！」

純「ううう、ぐっウウウウウ・・・・・・うぅっ！！」ブーーーーーーー

澪「うわっ！！汚い！」
律「ちょっとおい！何やってんだ！」
澪「律！二人をもう帰らせてくれ！！体中ベトベトだ！」

純「じゅぎあっでぐらざい！」

澪「何言ってんだバカ！もう帰れ！」

律「あーもう！ちょっとこっち来い！」

純「話が違うじゃねぇかよ！」

律「何言ってんだよ！全然一気飲み出来てないじゃんか！」
唯「そうだよ！あれじゃダメだよ！」
紬「しかも噴出すなんて言語道断よ」
梓「あれじゃ誰でも怒るよ」
憂「じゃあ気を取り直して次！」
律「いや・・・もう帰ったほうが・・・」
純「何でだよ！まだまだ諦めねぇよ！」
律「え～・・・うーんそうだなぁ・・・」
憂「何か無いの？」
唯「あっ！」
純憂「何っ！？」
唯「一個思い出したよ！澪ちゃんて意外と読書家の子が好きだよ！」

『澪は読書家の女が好き』

律「あぁ～なるほどな！」
紬「確かに澪ちゃんはおとなしい性格だし」

梓「そういう子と気が合うってのもわかる気がします」

純「本当か？」

律「朗読なんてされたらイチコロじゃないか？」

憂「でも何の本がいいんだろ・・・」

紬「私、丁度本持ってるけど」

純「おぉ！ちょっと借りるぞ！」バッ

紬「あっ！でもそれ・・・」

純「澪先輩！ちょっと聞いててください」

澪「はぁ・・・今度は何？」

純『これはある若いカップルが体験したお話です』

澪「はぁ～何だよもう・・・」

純『デートの帰り道、男はカーナビを見ながら彼女の家まで向かう途中でした』

澪「・・・・・」

純『しかし、助手席に座っている彼女の様子がおかしいことに気が付きました』

澪「・・・ん？」

純『額から汗を流し、息も荒く、顔も真っ青になっていました』

澪「ちょ、ちょっと待って」

純『一刻も早く彼女を送り届けようとカーナビの指示で道を真っ直ぐ進んでいました』
澪「す、鈴木さん！？」
純『と、その時・・・』
澪「なぁこれってまさかこわ」
純『止まって！！！！』
澪「ひいぃぃ！」
純『突然助手席の彼女が叫び出し、男は車を急停車させました』
澪「あ、あ、あ、もうやめ・・・」
純『すると目の前は断崖絶壁、男の背筋は凍りました』
澪「終わり？もう終わりか！？」
純『・・・・・』
澪「何だよ何か言え・・・」
純『シネバヨカッタノニ』
澪「ひぃっ！」
純『その言葉が最後にカーナビから聞こえてきました』
澪「ミエナイキコエナイミエナイキコエナイ」

純「澪先輩付き合ってください！」

澪「・・・・・」

純「澪先輩？」

澪「うるさいバカ！どっかいけ！」
唯「もぉ何やってんのさ！」
澪「唯！さっさと帰らせてくれ！」
唯「ごめんね、澪ちゃん！」

純「どうなってんだよ！全然ダメじゃねぇか！」
律「ダメに決まってるじゃないか！」
唯「怖い話は澪ちゃん苦手なんだよ！？」
紬「そうよ、だから私は止めようとしたのに」
梓「ムギ先輩・・・そんなの読んでるんですか？」
憂「じゃあ次！」
梓「いや帰ったほ　純「帰らねえよ！！」
梓「・・・・・・」
紬「そうだ！」
純「んっ！？何だ？」
紬「この前小耳に挟んだんだけど、食べ物の好き嫌いの無い子は好みだって言ってたわ」

『澪は食べ物の好き嫌いが無い女が好き』

律「あぁ～確かに・・・」
唯「純ちゃんは好き嫌い無いの？」

純「私は何でも食べる！これならイケるんじゃないか！？」

紬「でも只単に何でも食べるだけじゃ駄目よ」

憂「どういうこと？」

紬「例えば・・・世に言うゲテモノとかを食べられないと振り向かないんじゃない？」

梓「ゲテモノを笑顔で食べられたら間違いないと思うけど・・・」

純「それが出来るとしてもさ、ゲテモノなんてここに無いじゃん！」

律「いや、あっても無理だろ・・・」

純「大丈夫だよ！食ってやるよ！」

唯「やめておいたほうが・・・」

憂「あぁーーーー！！」

梓「わっ！今度は何！？」

憂「これ・・・ゲテモノの盛り合わせじゃん！」

律「うわっ！気持ち悪い！」

唯「うわわぁ～」

紬「いやあああ！」

梓「ちょっと近づけないでよ！」

憂「タガメ、サソリ、ムカデ、セミ、カブトムシの幼虫・・・選び

たい放題じゃん！」

律「うっ見るだけで吐き気が・・・」

唯「でもこれは・・・」

紬「全部食べれば・・・確実ね」

梓「おえっ想像するだけで吐きそう・・・」

純「よし！行って来る！」

憂「頑張って！」

律「今回はマジやばいぞ！？」

純「澪先輩！」

澪「もう何だ・・・っていやあああああああああ！！」

純「見ててください！」

澪「ひいいいいい！何する気だよ！」

純「こんじょーー！！」パクッ　モグモグ

澪「おえっ！」

律「げっ！マジで食ったのか！？」

唯「純ちゃん凄いね・・・」

紬「うぅ・・・」

梓「げぇ・・・」

憂「純ちゃんファイト！」

純「おうっ・・・ぐふぅ・・・」モグモグクチャクチャ

澪「うううう・・・もうやめてくれ・・・」

純「うぅ！げえええええ！！」ビチャビチャビチャ

澪「あ、あ、あ・・・」

律「想像通りの結果だな・・・うっ私トイレに・・・」スタスタ

唯「私も・・・」スタスタ

紬「もう限界・・・」スタスタ

梓「吐きそうです・・・」スタスタ

純「うぅ～・・・つ、付き合って下さ・・・」

澪「触るな！寄るな！！あっちいけーー！！！」

純「あんなもん食えねぇよ！」

律「だから・・・うぅ言っただろ」

唯「無茶苦茶だよ・・・」

紬「もうこれでお終いね・・・おぇ」

梓「本当に・・・帰ったほうがいいって」

憂「何言ってんのよ！」

純「帰るわけにはいかねぇよ！」

澪　ガタッ

律「あれっ？澪どこ行くんだ？」

澪「トイレだ！」ガチャン

純「早く！何かないの！？」

梓「はぁ～ったく・・・純、これはとっておきよ！これで無理ならもう見込みは無いからね！」

純「おお！教えてくれ！」

梓「澪先輩はサプライズをしてくれる人が大好きなんだって」

『澪はサプライズをしてくれる女が好き』

純「サプライズ？」

憂「例えばどんな？」

梓「誕生日でも無いのにプレゼントくれたりだとかそういうことよ」

律「あぁ～そう言えば昔、澪に内緒で誕生日祝ってやったら大泣きして喜んだっけ・・・」

唯「これが成功すればさっきのも帳消しになるんじゃない？」
紬「でもどんなサプライズがいいのかしら？」
律「ベタに何かあげるとかでいいんじゃないか？」
純「そんなんじゃダメだ！もっと驚くようなことは無いの！？」
律（完全にタメ口だな．．．」
憂「あぁーーーーーーーー！！」
唯「また何か見つけたの？」
憂「これ（ピー）じゃん！」
純「おぉ！」
憂「これで（ピー）の（ピー）から（ピー）して（ピー）すれば完璧じゃん！」
律「いやいやいや、それは違うぞ！」
唯「それはマズいって！」
紬「サプライズの意味が違うわ！」
梓「純！それだけはやめて！」
純「うるせえ！ここまで来たらもう引き下がれねぇよ！」

トイレ

澪「はぁ～ひどい目にあった・・・」

純「澪せんぱ～い！」

澪（ひっここまで追って来た！）

純「澪先輩！改めて言います！私と付き合ってください！」

澪（まだ言ってる・・・）

純「もう一度言います！澪先輩！わたしとつき　澪「嫌だ！！」

純「・・・・・・」

澪（諦めたのか？）

純「そうですか・・・じゃあ今から確実に私に惚れさせてみせます！」

澪（は？何言ってんだよ・・・）

純「澪先輩！私のサプライズ受け取って下さい！」

澪（サプライズ？何言って・・・）

ザッパァァァァァァーーーーン

次の日の放課後

律「梓、鈴木さんは大丈夫なのか？」

梓「あの後澪先輩にタコ殴りにされましたけど至って元気ですよ」

唯「純ちゃんはやっぱり凄いね」

紬「あんなことされて澪ちゃんは大丈夫なのかしら？」

律「さすがに体調が悪くなったってよ」

梓「トラウマにならなきゃいいんですけどね・・・」

唯「でもトイレの最中に上から『赤ペンキ』が降ってきたら誰でもトラウマになるんじゃないかな？」

律「そうだな・・・今は家で寝込んでるから後でお見舞いに行ってみるか！？」

唯「さんせー！」

紬「私も！」

梓「私もです！」

純憂「私達も！！」

律唯梓紬「お前らは来るなっ！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4449z/

鈴木純がやって来た

2011年12月15日03時47分発行